



季節を知ったら  
暮らしが楽しくなった

（第六七号）

秋分 九月二十三日



## 竹川竹斎

松阪の櫛田川沿いに射和という古い町があります。江戸時代、松阪商人が江戸で活躍したことはよく知られていますが、それ以前に丹生の水銀を加工した軽粉、いわゆる伊勢白粉で財を築いた町です。この秋はその射和出身の偉人、竹川竹斎の生誕二百年年を記念した講演会や一代記の劇などが地元を中心に催されています。

豪商の竹川家出身の竹斎は、幕末から明治維新という激動の時代に生きた人で、日本で最初の私立図書館「射和文庫」を開き、地方での人材育成に尽力したほか、農業用のかんがい池の普請、製茶の奨励、射和万古を開くなど物心両面から地域を支援してきました。

そして全国に名を知られるようになったのは、ペリー来航のあった一八四五年、「海防護国論」という論文を記し、知人の勝海舟に送り、幕閣に読まれたことからです。翌年、幕府の海防巡見使一行が伊勢に来た際も勝海舟や大久保一蔵らと夜を徹して語り合ったといえます。

地方にありながらどうして竹斎は高い知識を身につけたのか、また幅広い人脈を築いたのか、年譜を調べてみました。すると伊勢との意外な接点があったのです。母親は内宮の禰宜で、国学者の荒木田久老の娘であること、少年期には江戸と大阪で修業しますが、その後は久老の子で国文・和歌に通曉し、父の家学をついだ叔父にあたる荒木田久守について国学を学んでいたのです。伊勢が国学の拠点であった当時、その一翼を担う親族から直に学問を学んでいたのです。

さらに竹斎の妹の政子は、後に百五銀行の頭取になった陶芸家の川喜田半泥子を養育した祖母にあたります。伊勢国学を元にした知が脈々と続いていったのです。

文 千種清美

